ミスティックシンフォニーセカンド！

零堵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ミスティックシンフォニーセカンド！

【Ｎコード】
Ｎ２２７９ＢＡ

【作者名】
零堵

【あらすじ】
碧川早苗と品川晶は、未来から来た時空ポリス、ミスティに言われて、フェイクと呼ばれる物を捕まえるのを手伝っていた。
最後のフェイクがつかまってから一年後、再び未来からミスティとその弟、レイがやって来る。
ミスティは、再び、早苗と晶に、フェイクの捕獲の手伝いを頼むのであった・・・

～第一話～新たなフェイク誕生～

ここは何処かの町

「今日も、仕事疲れたわ・・・」

そう呟いたものがいた。
そう呟いたのは、水色の髪の長髪の女性。ミスティである。

「姉さん、お疲れ様」
そう話しかけたのは、ミスティの弟でもあるレイである。

「レイ、今日も無事仕事終わったわね」

「そうだね、今日のはわりと簡単だったかな？」

この二人の仕事と言うのは、時空ポリスと呼ばれる。
悪しき物を捉えたり、世界の成り立ちを正常に戻したりする。
所謂警察と呼ばれる仕事をやっていたりするのであった。

「じゃあ、レイ、家に帰って休みましょうか？」

「そうだね、姉さん」
二人がそう話していると、ピピピと腰に装着している通信機から無線が入った。

「はい、こちらミスティです」

「大変だ！」

「レーベン隊長？どうしたんですか？」

話しかけたのは、ミスティの上司であるレーベン隊長であった。

「フェイクがまた、過去に脱走した！ミスティ！至急現場に向かってくれ！」

「フェイクが！？」

「レーベン隊長、逃げたフェイクは一体何体ですか！？」

「逃げたのは、全部で１３体だ！その全部が過去に時空超えて行ってしまった！ミスティ、全部捕まえるのだ！」

「レーベン隊長は行かないんですか？」

「俺は、別の仕事が急遽入ってしまったのだ、すまないがミスティとレイの二人で捕まえてきてくれ！頼む！」

「分かりました！」

「はい、了解です！」

「頼んだぞ！」

そう言って、通信が切れた。

「じゃあ、早速捜査を開始するわよ？分かったわね？レイ」

「分かったよ、姉さん、まず最初の一体のフェイクが何処に逃げたか調べるよ」

そういうと、レイは何かの機械で調べる。

数分後・・・

「分かったよ、姉さん、最初の一体の逃げた場所が」

「どれどれ・・・ここは・・・！」

「そう、以前僕達がフェイクを捕まえにいった町だよ、じゃあ早速行こう！以前のフェイクが現れた年代から一年後に逃げたみたいだよ！」

「そう・・・じゃあ、行くわよ！」

「了解！時空間ゲート解放・・・・ＯＫだよ！姉さん！」

「Ｏｋ、ミスティックトラベル！」

そう言うと、二人はその場所から消えたのであった。

そして過去へと向かったのである・・・

～過去の時代～

ここは、とある町の中

急いで走っている者がいた。

「う～遅刻しちゃうよ～！」

走りながらそう言ったのは、碧川早苗（みどりかわさなえ）である。

早苗は、学校に遅刻しそうなので、走っているのであった。

「なんで目覚まし壊れてるかな・・・、新しいの買わないと・・・」

そうぶつぶつ呟いていると、早苗に声かける者がいた。

「っよ、早苗」

「あ、晶、走んなくていいの？」

早苗に話しかけたのは、早苗の幼馴染である品川晶（しながわあきら）であった。

「まあな、ここからだと歩いていても、十分間に合うぞ」

「そっか、じゃあ私も歩いていこっと」

そう言って、早苗は走るのをやめた。

「それにしても・・・、一緒に歩くの随分と久しぶりな感じがするな」

「そうだっけ？まあ、朝は擦れ違いが多かったからね？」

「そうだな・・・それにしても・・・早苗もつけてるんだな？それ」

「そういう晶だってつけてるじゃん、そのフェイクレーダー」

「まあな、もしかしたらまた変身出来るかも知れないしな・・・」

「そうだね・・・あれから、もう一年たったけど・・・結局ミステ

ィさんとか逢わなかったなあ・・・」

この二人は過去にミスティから、ある物を貰って変身して、ミスティの手伝いをしていたのである。
そして、その手伝った記念にミスティグローブ、フェイクレーダー、ライトブーツの三点を、二人は貰ったのであった。

「また変身とかして、正義の為に戦ってみたいんだけどなあ・・・早苗は、どうだ？」

「私？そうね・・・楽しかったし・・・またやってみたいと思ったことはあるけど・・・でももう、無理なんじゃないかな？フェイクレーダー、あれから鳴った事がないし」

そう二人が話していうと、ビーっと言う音が二人の腕にしている、フェイクレーダーが鳴りだしたのであった。

「え！？フェイクレーダーが鳴ってる！？」

「俺のもだ！これはもしかして・・・」

そう二人が話した後、二人の立っている前方の空間が歪んで、中から二人現れたのであった。

「あ！・・・ミスティさんにレイ君！？」

「お久しぶりです！早苗さんに晶さん！二人とも・・・一年前とあまり変わってなくてよかったです！」

「お久しぶり、僕も姉さんと一緒にやってきたんだ」

「もしかして・・・またフェイクが現れたの！？」

「はい、そうなんです！この町の近くに未来からまた、フェイクが脱走したんです、早苗さん、晶さん、また協力してくれませんか？」

「俺はするぜ！早苗はどうだ？」

「私もするよ！また、ミスティさんの力になりたいし」

「ありがとうございます！じゃあ、レイ！フェイクの現在位置を特定して？」

「分かったよ、姉さん、フェイクは・・・」

そう言って、レイは調べる。

「ここから五百メートル離れた場所にそれらしい反応があるよ！」

「そう、じゃあ行きましょう！」

「うん！」

「ＯＫだぜ！」

こうして、四人は学校と反対方向へと向かうのであった・・・

それを見ていた者がいた。

「あれ？早苗ちゃんと晶君、学校と反対方向に向かってるけど、どうしたんだろ？もしかして・・・これは絵本のネタがまたやってき

たって事かしら?私も行ってみよっと!」

そう言ったのは、早苗の親友でもある篠崎律子(しのざきりつこ)であった。
律子は早苗と晶の二人を追いかける事にしたみたいである・・・
そして・・・学校では、キーンコーンと授業の開始を知らせる鐘が
鳴り響いていたのであった・・・

～第一話～新たなフェイク誕生～（後書き）

ミスティックシンフォニーの続編です。

～第二話～最初のフェイク～（前書き）

はい、零堵です。
続きの話です。

～第二話～最初のフェイク～

未来いたミスティとレイは、再びフェイクが逃げだしたのでそれを捕まえるために、過去へと戻っていき、過去に一緒に協力した者たち、早苗と晶に一年ぶりに出会ったのでした・・・

「ここが現場みたいだよ？」

そう言ったのは、ミスティの弟、レイであった。
レイは、ミスティと同じく時空ポリスでもある。
レイは、フェイクが出現したと思わる場所に、ミスティと早苗と晶を案内したのであった。

「そう見たいね・・・でも、ここであってるの？レイ」

「うん、間違いないみたいだけど・・・姿が見えないって事は何かに擬態して、姿を消してるのかも」

「何かに擬態か・・・早苗、お前わかるか？」

「私に聞かないでよ？晶・・・そうね・・・」

早苗は、キョロキョロとあたりを見渡してみる。辺りは公園で、子供たちが普段遊んでいる滑り台やブランコ、砂場とかあった。

「あ、あれかな？あの砂場の中」

「砂場の中？どれどれ？」

そう言って砂場の中を確認してみる。
砂場は異様に盛り上がっている場所があった。
まるで砂場の中に何かが隠れてるみたいでもある。

「あ、あれだよ？姉さん、フェイク反応、確かにあの砂場から出てるよ！」

「そう、じゃあさっそくフェイクを捕まえるわ！早苗さん晶さん、協力してくれません？」

「俺はＯＫだぜ！」

「私もだよ？でも、何をしたらいいの？」

「また変身して、協力してください」

「変身？俺、あれから何回も変身しようとしたけど、出来なかったぜ？」

「晶・・・そんな事してたんだ・・・（まあ私もちょっとだけやってたけど）」

「あ、そうでした、ちょっとそのミスティグローブ貸してください」
ミスティがそう言うと、二人は装着していたミスティグローブをミスティに渡す。

「セーフティロック解除、コスチュームチェンジ解禁！はい、これで再び変身出来るようになりましたよ」

そう言ってグローブを二人に返す。
「本当！？ありがとう、ミスティさん」
「よっしゃあ！腕がなるぜ！」
「使用方法とかはわかってますね？じゃあお願いします！」
「了解、行くぞ！早苗」
「うん、晶！」
早苗と晶はあの言葉を言う。
「ミスティックシンフォニー！」
「ミスティックシンフォニー！」

そう言うと、早苗達が光りだし、コスチュームと武器が握られていた。
早苗は、槍を持った騎士に、晶は大きな剣を持った剣士になっていた。

「うおお！懐かしいぜ！やっぱ正義と言ったら剣士だよな！」
「私も結構かっこいい服装になったわ～、なんか力がみなぎるって感じかな？」

「早苗さん！晶さん！よろしくお願いします！私とレイはサポートしますので！」

「了解！行くよ？晶！」

「おお！」

晶はフェイクがいると思われる砂場に向かって剣を振り下ろす。

「行くぜ、聖剣十字斬（シャインクロス）！」

「何？その技？」

「ゲームで俺の好きなキャラの技さ、とりゃあ！」

晶の剣技が砂を巻き上げて風をおこした。
砂がはれてフェイクの正体が判明した。

「あのフェイク・・・識別・・・虫型フェイクみたい」

「虫！？なんか嫌だわ・・・なんかあの形見てると・・・あの虫を思い出しそう」

「そういえば姉さん、あの虫嫌いだったよね・・ほらあのゴ・・」

「それ以上言っちゃ嫌あ！」

「グ・・・姉さん・・・何も叩かなくても・・・」

そう言ってレイはミスティの攻撃をくらって気絶したみたいである。
「なんかあの形何かに似てると思わないか？早苗・・・」
「それ以上言わないで、さあとっとと倒すわよ！」
「お、おお！」
早苗と晶は虫型フェイクに向かって攻撃を繰り出す。
虫型フェイクは、早苗と晶の攻撃をギリギリでかわす。
「く、なかなかダメージを与えられないわね・・・しかもカサカサ音がして、あの生物そっくり！早く倒すわよ？晶！」
「そうだな・・・よし、早苗、俺が攻撃するから、逃げたところをお前が仕留めろ！」
「わかったわ！」
「よし、行くぞ！」
晶は虫型フェイクに向かって切りかかっていく。
虫型フェイクは、晶の剣技を避けて、早苗のほうに飛ぼうとしていた。
「早苗！今だ！」
「うん、いっけええ！」

早苗は槍をぶん投げる。
槍はまっすぐ飛んでいき、虫型フェイクに突き刺さった。

「よし、決まったわ！」

「今がチャンス見たいですね！行きます・・・未来に帰れ！ミスティックフォース！」

ミスティの言葉によって、虫型フェイクはすーっと消滅したのであった。

「これで、任務完了です、ありがとうございます、早苗さん晶さん」

「いや、こっちも久しぶりに正義の事が出来てよかったぜ？」

「私も、こういうのちょっと楽しかったかな」

そう言ってると、タイムリミットが過ぎたのか、早苗と晶の服装が元に戻ったみたいである。

「いたたた・・・姉さん、力強すぎだよ・・・、あ、どうやら終わったみたいかな？」

レイが気絶から目が覚めたみたいである。

「そうよレイ、なんとか最初の一体は未来に送り返したわ」

「そうみたいだね、あと残りは十二体だよ」

「そうなの？ミスティさん？」

「ええ、そうなんです、早苗さん晶さん、よろしければ最後まで協力してくれませんか？」

「俺はＯＫだぜ？早苗は？」

「私もＯＫよ？」

「ありがとうございます、じゃあレイ、フェイクの情報はどうなってるの？」

そう言ってレイは、機械を動かしてこう言う。

「今のところ情報はないから、未来に戻らないとわからないよ？」

「そう、じゃあ未来に戻りましょう、早苗さんに晶さん、私とレイは、未来に戻るので、これを渡しときます」

そう言ってミスティは早苗たちに何かを渡す。

「これは？」

「これはミスティックフォンです、これで私との連絡が取れるので、再びフェイクが現れた時に連絡します、じゃあ行くよ？レイ」

「了解、姉さん」

そう言ってレイとミスティは、早苗たちから離れていったのでした。

「あと十二体か・・・次がどんなのが出てくるのだろうな？」

「さあ、でも全部捕まえてみようと思うかな？」

そう話していると、早苗たちに声をかけてくるものがいた。

「早苗ちゃんに晶君、見させてもらったわよ？」

「あ、律子ちゃん？いたの？」

声をかけたのは、早苗の親友の篠崎律子（しのざきりつこ）である。

「ええ、これでまた絵本の構想に役に立ちそうだわ♪それより・・・」

「それより？」

「もう完璧に学校、遅刻してるわよ？まあ私も人の事言えないけど」

「あ、そうだった！」

「すっかり忘れてたな、とりあえず学校行くか？」

「そうね・・・」

「じゃあ行きましょうか？」

こうして三人は、遅刻しているの確定だったが、学校に行くことにしたのであった・・・

～第二話～最初のフェイク～（後書き）

零堵です。この物語も投稿します。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2279ba/

ミスティックシンフォニーセカンド！

2012年1月5日20時48分発行